

元曉『涅槃宗要』における引用文の検討

藤井教公

はじめに

元曉（六一七—六八六）の『涅槃宗要』は大乗『涅槃經』に対する達意的な疏で、主として涅槃と仏性について解釈し、諸師の説を挙げながら、それらの会通を試みている。元曉は新羅仏教において大きな功績を残した仏教者で、これまでの研究は数多いが、本書『涅槃宗要』⁽¹⁾についての専論は少ない。それはテキストの不備がその一因とも考えられる。というのも、『大正蔵』三八所収のテキストは底本として「天治元年写日光輪王寺蔵本」（一二二四年写）を用いているが、この写本には巻末近くに欠損部分があり、しかも現存する写本はこれ一本のみ、すなわち、孤本なので、『大正蔵』テキストにも四十余字の欠字が存在する。また同テキストには写本からの誤記に由来する字句の誤りがあったりするのである。それでこれまで本疏の詳細な研究はあまり行われておらず、国訳も未だなされていないのが現状である。

筆者は近年来この『涅槃宗要』について訳注研究を進めて、その成果の一部分を発表した。⁽²⁾本稿では、その結果を踏まえて、『涅槃宗要』における經典論書の引用や諸師の学説の引用など、本疏に見られる引用について、涅槃門中の第五、三事門の部分（『大正蔵』三八、二三九a—一三—二四五b二三）まで経論や各師の説の引用文を調査し、元曉の引用の特徴について検討したい。またさらに、『涅槃宗要』には淨影寺慧遠の著作からの影響が指摘されているが、それがどの程度のものなのかを併せて検討したい。

一 『涅槃宗要』の先行研究

元曉は生涯に七十余部という多くの著述を残したが、そのうち現存するものとして二十二部を数えるという。⁽³⁾その現存著作についての成立時期の研究は、近年では石井公成氏や福士慈稔氏らによってなされてきたが、最近、⁽⁴⁾それらの批判的検討と元曉の新訳依用状況の再検討を通じて、伊吹敦氏が

『金剛三昧經論』や『涅槃宗要』などについて新しい知見を示されている⁽⁵⁾。それによれば、『涅槃宗要』には新訳の『瑜伽論』と『大般若經』の引用があることと、また「普敬」という三階教の用語が使用されていることが従来指摘されていたが、氏は元曉はその三階教の知識を義湘から得たものであろうと推定して、『金剛三昧經論』や『涅槃宗要』撰述は「義湘が歸國した671年以降と見るべきである」とされている⁽⁶⁾。

『涅槃宗要』の内容については、これまで教判論や仏性如来藏思想、あるいは和諍思想などの点から触れられてきたが、浄影寺慧遠、ひいては地論宗南道派の影響を指摘したのは戦前の布施浩岳、近年の木村宣彰、木村清孝、石井公成の各氏らであろう⁽⁷⁾。しかしそれらは『涅槃宗要』の組織立てや、教理に関する慧遠説の取り込みなどについて大まかに言及するものであって、『涅槃宗要』の本文に沿って具体的に慧遠説の取り込みの状況を示したものはなかった。たとえば、布施浩岳の『涅槃宗の研究 後篇』では、『涅槃宗要』が教宗を明かすのに涅槃門と仏性門の二門に分けていることについて、「涅槃佛性の二門に分類するは、隋の慧遠の大乘義章に解説さるゝが文獻的には最初であつて」⁽⁸⁾とか、「滅」の四義について「事理德擇の四滅を設けて説明してゐるが、是は隋の慧遠の云へる滅の四義即ち應理能事と夫々相應する如くであつて、徳滅は能滅に、擇滅は事滅に、事滅は應滅に相應す

る。従つて此門の説は大體に於て慧遠説と同じと言つてよい」⁽⁹⁾とあり、また涅槃門中の「第四の二滅門は凡聖に通ずる性淨涅槃即ち同相涅槃と凡聖に通ぜざる方便壞涅槃即ち不同相涅槃等を説くもので、是等は慧遠の涅槃義にも見える説である」⁽¹⁰⁾などのことである。

また木村宣彰氏も布施浩岳の成果を踏まえて、『涅槃宗要』全体に亘る慧遠の教説、用語などについて摘記している⁽¹¹⁾。

以上の先行研究の結果を踏まえながら、次に元曉の引用する經典論書や各師の説について見ていこう。

二 『涅槃宗要』における引用文

引用文を、(ア) 經典、(イ) 論書、(ウ) 人師の説、の三種に分類して今回検討した範囲内（涅槃門中の第五、三事門まで）での結果を示そう。

(ア) 經典

まず第一に經典の引用では、次のような經典が引かれている。①南本『涅槃經』四十一回、②六卷『泥洹經』二回、③宝貴合曇無讖訳『合部金光明經』（『金鼓經』の名で引く）五回、④求那跋陀羅訳『勝鬘經』三回、⑤『妙法蓮華經』三回、⑥菩提流支訳『入楞伽經』（十卷楞伽）二回、⑦『大品般若經』二回（ただし全編を通じては四回）、⑧玄奘訳『大般若經』一回、⑨菩提留支訳『大薩遮尼乾子所説經』一回、⑩『六十華嚴』

一回、⑪『維摩經』一回、⑫『二夜經』一回、⑬菩提灯記『占察善惡業報經』（『占密經』の名で引く）一回。

右の結果で、『涅槃經』が最多なのは当然であるが、『金光明經』が多いのは、經の所説の三身論を援用するためである。たとえば一例を出すと、

如金鼓經言。依此二身一切諸佛説有餘涅槃。依法身者説無餘涅槃。何以故。一切餘究竟盡故。

とある。⁽¹²⁾ 右の文は『合部金光明經』の引用文で、有余・無余の二種の涅槃について、大乘における二種の涅槃を三身説によつて述べる段での引用である。『金光明經』の引用は、經典の字句に忠実な引用である。しかし、『涅槃經』などの場合は字句の省略や改変がしばしば行われている。經典や論書を注釈者自身が知悉して自家藥籠中のものとしているような場合は、引用の際に自在に省略、改変するのはよくあることである。

引用回数が少ないものでは『涅槃宗要』全体を通じて一回のみというのがあるが、そのような例として『二夜經』と菩提灯記『占察善惡業報經』とがある。前者は詳細未検だが、『大智度論』には

佛二夜經中説。佛初得道夜至般涅槃夜。是二夜中間所説經教。一切皆實不顛倒。若實無人者。佛云何言我天眼見衆生。是故當知有人者。世界悉檀故。非是第一義悉檀。

元曉『涅槃宗要』における引用文の検討（藤井）

とあり、⁽¹³⁾ 元曉の『大慧度經宗要』にも『大智度論』とほぼ同文の引用がある。『涅槃宗要』の引用では「二夜經云。從初得道夜乃至涅槃夜。是二夜中間不説一言字」として、⁽¹⁴⁾ 語句の改変がある。また、吉藏も『中觀論疏』や『大乘玄論』、『金剛般若經疏』などでこの經に自説に都合のよいように改変を加えて引用している。⁽¹⁵⁾

後者の菩提灯記『占察善惡業報經』二卷は「占密經云。煩惱生死畢竟無體。求不可得。本來不生。實更不滅。自性寂靜即是涅槃」⁽¹⁶⁾として『占密經』の名で引かれているが、この經は隋代の偽經とされている。中国唐代に慈恩大師基、湛然、澄觀などに引用例があるが、新羅朝鮮で流行し、八世紀の真表がこの經によつて「占察法会」を大成したという。⁽¹⁷⁾

また、一例のみの引用であるが、玄奘の新訳『大般若經』がある。後述の『瑜伽論』とともに本疏における新訳の依用として数えられているものである。この新訳經論依用について、石井公成氏は『大般若經』を、伊吹敦氏は『瑜伽論』と『大般若經』を挙げており、⁽¹⁸⁾ 両者とも共通して『大般若經』を引用として数えている。しかし、『涅槃宗要』が『大般若經』について言及するのは全編を通じてこの箇所のみだ一例、しかも「大般若經三種般若爲宗」（『大正藏』三八、二四〇a）という三種般若を出す短文のみで、これは引用文とはいえない。しかし、羅什訳の『大品般若經』の方は全編を通

じて四例の引用があるので、⁽¹⁹⁾経文の引用は『大品般若経』を依用することが普通だったといえる。

（イ）論書

次に論書の引用は以下の通りである。①『撰大乘論』（世親造・真諦訳『撰大乘論釈』を引用）六回、②『婆沙論』（浮陀跋摩・道泰・五百羅漢訳『阿毘曇毘婆沙論』を引用）五回、③玄奘訳『瑜伽論』二回、④真諦訳『起信論』三回、⑤勒那摩提訳『法華論』二回、⑤『大智度論』一回、⑥『成実論』一回、⑦真諦訳『仏性論』一回、⑧菩提流支訳『十地経論』一回、⑨僧伽跋摩訳『雜阿毘曇心論』（『雜心論』として引く）一回。

右の結果で、『撰大乘論』の引用が最多であるが、これは本論そのものでなく、世親訳の真諦訳を引いている。目立つのは、唯一の新訳として『瑜伽論』の引用が見えることである。このことは上ですでに触れた。本稿の検討範囲内では、それ以外の特徴は、真諦訳の依用が注意される。この点については、『俱舍論』引用の場合でも玄奘訳ではなく真諦訳を用いているという指摘と合致する。⁽²⁰⁾

また、『法華論』は二種の漢訳のうち、勒那摩提訳を依用しているが、これは同じ元曉の『法華宗要』の場合と軌を一にしていることは既に触れた。⁽²¹⁾

（ウ）人師の説

最後に人師の説の引用について見よう。これは「或有説

者」や「有師説言」などとして、一切その人の名を出さずに引いており、検討部分の範囲で二十二例を数える。その元曉の引用の意図は、ある説に関して異説を並列したり、正反対の説を出して、最終的には元曉が和諍の立場からそれらの説の意義を容認するためである。また、それらの引用説は元曉が字句の表現を変えているため、ある人師の説が誰の説なのか文章上からは同定するのがなかなか困難で、その説の内容から判断するほかはない。これまでに仏性門中の仏性の体について六師の説などはすでに布施浩岳などによって明らかにされているが、慧遠や智顗、吉蔵、玄奘といった著名な仏教者以外の人師の説については、今回の検討部分においても成果はなかった。⁽²²⁾

人師の説が引かれるのは、①『涅槃経』説法に至る因縁の有無、②経の「宗」についての六師の説の列举、③涅槃の語の有翻無翻の議論、④「大」の語の意義解釈、⑤涅槃の「体」についての議論、⑥法身の有色説と無色説などのテーマに関するものである。このうち、④の一説である「古人釋云。莫先爲生を指すことはすでに布施浩岳によつて指摘がある。⁽²³⁾

また、⑥の一説「或有説者。法身無色」（同上、二四五a三―四）の説は、慧遠の『大乘義章』中に、「有人釋言。法身無色」（『大正蔵』四四、一九五c一一）とあつて、これを元曉

が援用した可能性がある。一方、その反対の法身有色説の一説に「或有説者。法身實徳有無障礙色」(『大正蔵』三八、二四五a二三—二四)とあるのは、智顗の『維摩經文疏』の仏国品の釈中に「爲當は無障礙色有障礙見。有障礙色有障礙見有異也」(『新纂大日本統蔵經』一八、四六七c二〇—二二)などとして無障礙の色が有障礙の色との対比ですでに説かれている。したがって、この説は智顗の説の可能性がある。

三 慧遠説の取り込みについて

經典や論書の出典を調査すると、いくつかの經典論書はもとの典拠からの引用というより、慧遠の著作中にある引用からの再引用、すなわち孫引きであるということがある。たとえば、「大」に六義ありとして『涅槃經』を引く段で、次のようにある。

如經言。①大者其性廣博猶如虛空無不至。涅槃如是故名爲大。二者長之莫先故名爲大。如經言。②所言大者名之爲長。譬如有人壽命無量名大歲夫。三者深之莫先故名爲大。如經言。③大者名爲不可思議。一切世間聲聞緣覺不能測量涅槃之義故名爲大。四者高之莫先故名爲大。如經言。④譬如大山一切世人不能得上故名爲大。涅槃如是凡夫二乘及諸菩薩不能窮到故名爲大。五者多之莫先故名爲大。如經言。⑤譬如大藏多諸珍寶。涅槃如是有種種妙法珍寶故名大。六者勝之莫先故名爲大。如經言。⑥如世間中勝上主人名爲大人。(『大正蔵』三八、二四一a一六—二八)

元曉『涅槃宗要』における引用文の検討(藤井)

右の引用文中の傍線部①から⑥までは「如經言」として經の引用ということになっているが、実は經には引用文通りの經文はない。むしろ合致するのは以下に引く慧遠の『大乘義章』が述べる六義中の①から⑥の引用文に近い。すなわち、

爲摩訶般涅槃那。摩訶名大。大義有六。一者常義。故涅槃云。②所言大者名之爲常。譬如有人壽命無量名大丈夫。二者廣義。故涅槃云。所言①大者其性廣博。猶如虛空無所不至。涅槃如是。故名爲廣。三者多義。能別非一。故涅槃云。⑤譬如大藏多諸珍異。涅槃如是。多有種種妙法珍寶。故名爲大。四者深義。淵奧難測。故涅槃云。③大者名爲不可思議。一切世間聲聞緣覺不能測量涅槃之義。故名爲大。五者高義。位分高出餘人不至。故涅槃云。④譬如大山一切世人不能得上。故名爲大。涅槃如是。凡夫二乘及諸菩薩不能窮到。故名爲大。六者勝義。⑥如世間中勝上之人名爲大人。涅槃如是。諸法中勝。故名爲大。大義如是。(『大正蔵』四四、八一三c一八一—八二四a三)

とある。元曉と慧遠の引用を対比してみると、たとえば、元曉の引用①では「大者其性廣博猶如虛空無不至。涅槃如是故名爲大」とあり、慧遠の引用①では「大者其性廣博。猶如虛空無所不至。涅槃如是。故名爲廣」とある。『涅槃經』では元曉、慧遠両者に共通する「猶如虛空無不至」という文言はなく、「所言大者。其性廣博。猶如有人壽命無量名大丈夫」(『大正蔵』一二、六三一c一四—一五)となっており、「譬如」以下は元曉、慧遠両者が引く次の②の「譬如」以下の喩えと同じものである。⑥までの引用文についても同様な状況であ

る。このようなことは元曉がもし忠実に經文を見て引いたなら起こりえないことで、元曉が慧遠の『大乘義章』を再引用している一証左である。⁽²⁴⁾

同様の事例が『地持經』の引用として引いた「如地持經說。三乘聖人定有涅槃名爲正定。外凡定。無名爲邪定。内凡不定名不定聚。」（『大正藏』三八、二四三a二二—四）の引用文である。この引用文は典拠不明であるが、しかし、慧遠の『大乘義章』中に「如地經說。三乘之中定有涅槃。名爲正定。外凡定無。名爲邪定。三乘内凡形前名有。望後稱無。名爲不定。」（『大正藏』四四、八二七a六—八）と、内容がよく似た經の引用がある。『大乘義章』のこの引用の前後の文章も、『涅槃宗要』と大同小異である。このことから元曉は『大乘義章』から字句を改変して再引用したものと思われる。

またさらに、元曉が「如經言」として經文の引用として出しているが、実は慧遠の『大乘義章』の地の文にほかならないのが、「如經言。若無法身苦報不盡。何成涅槃。若無般若闍惑不除。豈得涅槃」（『大正藏』三八、二四四c二—三）の一文である。この引用文は經文には存在せず、『大乘義章』に「具攝三事以成涅槃。是義云何。若無法身苦報不盡。何成涅槃。若無解脫業結不除。何成涅槃。若無般若闍惑不滅不成涅槃。」（『大正藏』四四、八二二b二—四）とある部分を省略引用したものであることが知られる。この元曉の引用文に続く

部分にも『大乘義章』からの取意引用と思われる箇所が見出される。

『涅槃宗要』における慧遠の影響の大きさはこれまで指摘されてきたところであるが、以上のような検討結果からすると、慧遠の教説や用語の採択などに止まらず、經典論書の引用も慧遠からの再引用が見られるなど、『涅槃宗要』作成に直截的影響が見られることが明らかになったといえる。

小結

以上、『涅槃宗要』における引用文の検討を、涅槃門中の第五、三事門までの範囲で行ってきたが、その結果を記すと、經典では多くの經が引かれているが、『涅槃經』を最多として、『合部金光明經』の引用も多い。逆に一度の引用で目を引くのは『占察經』である。新羅での流行という背景があったのか。

論書では真諦訳『撰大乘論釈』の引用が多いが、旧訳『婆沙論』などのアビダルマ論書の引用もある。また新訳『瑜伽論』の引用が見られた。

人師の説の引用は、道生、慧遠、智顗、吉藏、玄奘などの著名な仏教者の説は同定しやすいが、元曉とほぼ同時代の仏教者の説を同定するのは困難である。今後の課題としたい。『涅槃宗要』における慧遠の影響は、引用文検討の結果、

これまで指摘されていたよりもさらに大きいことが分かった。慧遠の著作からの再引用や、慧遠の地の文が経の引用として示されているケースもあった。今後、『涅槃宗要』の文を精査することによって、元暁の『涅槃宗要』作成状況が明らかになる可能性がある。

- 1 たとえば金勲氏は、その著『元暁佛学思想研究』（大阪経済法科大学アジア研究所、二〇〇二年）の中で、同書刊行時までの研究書として二十五点、論文で五百九十六点を網羅している（二二三―二五一頁）。
- 2 藤井教公編著『涅槃宗要』訳注（一）（『インド哲学仏教学論集』第一号、二〇一二年三月、一―四七頁）。
- 3 福士慈稔氏は種種の蔵書目録から元暁の著作と思われるものを拾い上げて表を作成されている。その表によると七十四部を数えるが（福士慈稔『新羅元暁研究』大東出版社、二〇〇四年、一六二―一六七頁）、その中には梯信暁氏がすでに同一書としている『無量壽經料簡』と『無量壽經宗要』を別著作としているなど、その著作数は確定的なものではない（梯信暁「元暁の浄土教思想について——『両卷無量壽經宗要』を中心として——」三崎良周編『日本・中国仏教思想とその展開』山喜房佛書林、一九九二年、一八六頁）。
- 4 石井公成「新羅仏教における『大乘起信論』の意義——元暁の解釈を中心として」（平川彰編『如来蔵と大乘起信論』春秋社、一九九六年、五四五―五七九頁）、福士慈稔同上書、一七二―一八〇頁。
- 5 伊吹敦「元暁の著作の成立時期について」（『東洋学論叢』第

元暁『涅槃宗要』における引用文の検討（藤井）

- 三一号、二〇〇六年三月、（五一）―（五九）頁。
- 6 伊吹敦同上論文、（六一）頁。
- 7 布施浩岳『涅槃宗の研究 後篇』（国書刊行会、復刻版、一九七三年（初版一九四二年）、六一九―六三〇頁）、木村宣彰「元暁の涅槃宗要——特に浄影寺慧遠との関連——」（『佛教学セミナー』第二十六号、一九七七年十月、四七―六〇頁）、木村清孝「元暁の闡提仏性論」（古田紹欽博士古稀記念会編『仏教の歴史的展開に見る諸形態』創文社、一九八一年、三二三―三三六頁）、石井公成「元暁の和諍思想の源流——『楞伽經』との関連を中心として——」（『印度学仏教学研究』第五一卷第一号、二〇〇二年十二月、一九―二三頁）。
- 8 布施浩岳同上書、六二三頁。
- 9 同上、六二三頁。
- 10 同上、同頁。
- 11 木村宣彰上掲論文、五一―五三頁。
- 12 『大正蔵』三八、二四四a二五―二六。
- 13 『大正蔵』二五、五九c。
- 14 『大正蔵』三八、二三九c。
- 15 『中観論疏』では「如二夜經中常宣中道」（『大正蔵』四二、一六五a）とあり、『大乘玄論』では「故二夜經明。從得道夜至泥洹夜。常說中道」（『大正蔵』四五、七五b）、『金剛般若經疏』では「如二夜經云。佛從得道夜訖至泥洹夜常說波若」（『大正蔵』三三、八七a）とある。
- 16 『大正蔵』三八、二四一c二三―二五。
- 17 山中行雄「高麗の偽經『現行西方經』について」（『佛教大学総合研究所紀要』第一六号、二〇〇九年三月、二九五―二九六頁）。

元曉『涅槃宗要』における引用文の検討（藤井）

二六六

- 18 石井公成「新羅仏教における『大乘起信論』の意義」、五五三頁、伊吹敦上掲論文、一四四頁。
- 19 『大正蔵』三八、二四一c、二四二b、二五五b三行目、一一行目。
- 20 福士慈稔上掲書、一七三頁、及び、伊吹敦前掲論文、（五六）頁。
- 21 藤井教公上掲論文、二頁。
- 22 布施浩岳上掲書、六二五頁。また、日本印度学仏教学会第六十五回学術大会での本稿発表時、身延山大学特任講師・金炳坤氏より、『法華宗要』に引かれる「有師」説が神泰（一六四五―一六五七）のものであることが同定できるので、『涅槃宗要』においても彼が「有師」の一人である可能性があることを教示された。記して謝意を表したい。
- 23 布施浩岳上掲書、六二〇頁。
- 24 同じ慧遠の『大般涅槃經義記』にも「大」の六義を出して「大義有六。一常故名大。故下文言。大名爲常。二勝故名大。如世勝人。名爲大人。故下文言。是人若能安住正法。名人中勝。勝故名大。涅槃如是。三廣故名大。故下文言。大名廣博。體窮法界。名性廣博。四多故名大。故下文言。譬如大藏。涅槃如是。多有種種妙法珍寶。故名爲大。」（『大正蔵』三七、六一三b二三―二八）という。ちなみに吉蔵も『涅槃經遊意』で同様の解釈と經の引用を出している（『大正蔵』三八、二三三a八一―二〇）。

〈キーワード〉 元曉、『涅槃宗要』、淨影寺慧遠

（国際仏教学大学院大学教授）

新刊紹介

高崎 直道 監修 桂 紹隆・斎藤 明・下田 正弘・末木 文美士 編

如来蔵と仏性

シリーズ大乘仏教 第8巻

A五版・三八四頁・本体価格三、五〇〇円
春秋社・二〇一四年一月